第一印象での好意感情が友人関係の形成に与える影響

小田果凜
（山口大学大学院人間社会科学研究科）

研究の目的

第一印象は，身体的・心理的特徴に対する初期評価であり，その後の友人関係の形成に影響を与えることが知られている（高橋・齋藤，2015）。本研究では，第一印象が，最初の知覚であることから視覚情報に限定し，友人になる場合とならない場合の印象評定値の差異を検討する。その際，「10 項目の印象評定値（印象得点）及び，その合計得点（印象合計得点）は，いずれも友人になる場合のほうが友人にならない場合より高い」を仮説とし，印象形成において顔のどのパーツが印象に影響を与えているかについても検討する。

方法

顔画像は，性別（男,女），髪型（長,短），表情（真顔,笑顔），顔パーツのサイズ（ノーマル,小,大），眉（平行,下がり,上がり）を組み合わせ，Canva で作成した日本人大学生風の顔画像を基に Face App・Soda を用いて 16 種類生成した。提示順は女性，短髪，真顔，平行眉から男性，短髪，笑顔，上がり眉までの 16 枚。大学生 20 名（男女各 10 名，平均年齢 20.95 歳）を対象に，3 秒間の顔提示後，印象に残った要素選択，友人になるか否かの判断，および印象評定尺度（川名（1986）を一部修正。10 項目 5 件法）への回答を全 16 顔画像で繰り返した。

結果

16 枚の顔画像に対し，印象評定尺度 10 項目を，友人になるか否かでの各印象得点の差を検討した。「頭がよい」「陽気な」を除く 8 項目で有意差がみられ，いずれも友人になる場合の得点が高かった。また，10 項目の合計得点でも有意差がみられ，全体的に「友人になる」場合が高い傾向が確認された（Table1）。

顔画像ごとの印象得点の差の検定（Table 1）

水準の組	差	標準誤差	95%下限	95%上限	*t*値	df	*p*値	*d*
1誠実な - 0誠実な	0.71	0.09	0.53	0.90	8.33	15	.000	2.46
1善良な - 0善良な	0.67	0.12	0.42	0.92	5.67	15	.000	2.71
1公平な - 0公平な	0.74	0.09	0.55	0.93	8.29	15	.000	2.23
1頭がよい - 0頭がよい	0.21	0.12	-0.04	0.47	1.77	15	.098	0.33
1陽気な - 0陽気な	0.07	0.15	-0.24	0.39	0.50	15	.627	0.07
1親切な - 0親切な	0.81	0.12	0.56	1.06	6.88	15	.000	1.62
1親しみやすい - 0親しみやすい	0.87	0.13	0.59	1.15	6.66	15	.000	1.20
1人とうまくやれる - 0人とうまくやれる	0.51	0.13	0.23	0.79	3.93	15	.001	0.85
1好感のもてる - 0好感のもてる	1.19	0.10	0.98	1.39	12.28	15	.000	3.16
1付き合いやすい - 0付き合いやすい	1.22	0.09	1.02	1.41	13.09	15	.000	2.71

さらに，印象合計得点の友人になる場合の印象合計得点（1 印象合計得点）と友人にならない場合の印象合計得点（0 印象合計得点）の平均とその平均の差の検定（Table2）を実施したところ，「1 印象合計得点-0 印象合計得点」の平均値の差に有意差がみられ，「1 印象合計得点」の方が高かった。

顔画像ごとの印象合計得点の差の検定（Table 2）

水準の組	差	標準誤差	95%下限	95%上限	*t*値	df	*p*値	*d*
計得点 - 0 印象	6.51	0.82	4.77	8.25	7.96	15	.000	1.94

加えて，印象に残った要素の出現頻度を分析した結果，顔画像の髪型（長髪・短髪）では有意差な偏りはなく，印象に残った部位（眉，目，鼻，口，全体の雰囲気，特になし）と顔の特徴（表情，顔パーツ，眉の形状）との間には有意な偏りが確認された（Table3）。

表情別の印象に残った要素のクロス集計表（Table 3）

変数		列						
	出現値	眉	目	鼻	口	全体の雰囲気	特になし	合計
行	真顔	31	64	12	34	17	2	160
	笑顔	16	42	6	53	39	4	160
	合計	47	106	18	87	56	6	320

考察

本研究では，友人になる場合の印象得点が高くなるという仮説を検証した結果，部分的に支持された。また，顔の印象形成において印象に残りやすいのは，眉よりも目や口であり，表情によって注目要素が異なることが示唆された。特に，真顔では目，笑顔では口が印象に残る傾向があり，参加者は短時間の提示でも表情を構成する要素に注目していたことが示された。

今後の課題としては，印象に残った要素として「全体の雰囲気」も多く挙げられていたことから，言語化しにくい感覚的要因の関与を検討するほか，印象に残った要素の理由を質的に分析することで，より詳細な個別の分析を行うことが挙げられる。

謝辞

本研究の実施にあたり，山口大学教育学部の長谷和久先生，恒吉徹三先生にご指導いただきました。感謝いたします。